

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つげられた

第152号

イザヤ 65:1

平成20年5月30日

~~~~~

人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た」と言った。彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来たが、アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」しかし、カインは… 弟アベルに襲いかかり、彼を殺した…

アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」… アダムの歴史の記録 … アダム…セツ…エノシュ…ケナン…マハラエル…エレデ…エノク…メトセラ…レメク…ノア…

さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。そこで、主は、「わたしの霊は、永久に人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう」と仰せられた…主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった…「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。」…しかし、ノアは、主の心にならなっていた…ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ… 創世記4-6章

創世記6章までの一連の出来事の背後には、神のご計画を妨害しようと躍起になっているサタンの人間史への介入が見られます。今月は4章以降の出来事を考察することにしましょう。

神の御命令への反逆により、普遍的に罪に支配されるようになった人間は、神から引き離され、そのままではサタンの王国に属する者となりました。すべての人を墮落させ、自らの王国を打ち立てようと試みたサタンの策略が成功したかのようでした。しかし、すかさず神が、サタンと人類の母、女との間に「敵意」を置くという預言をされたことにより、人を完全な支配下に置くというサタンの野心は閉ざされたのです。人に神が授けられた良心が正しく働くとき、人はサタンの不義、不道德、不正、誘惑に対抗し、それ以上の罪の奴隷に陥ることから守られるよう神が安全弁を敷いてくださったのです。しかも、究極的には人を罪の隷属下から解放し、いのちに与らせる「メシヤ」が女を通して誕生し、メシヤを通しての救いを信じる者には新しい甦りの体が与えられ、永遠に生きる者となるという神の人類救済のご計画の片鱗が表わされた預言でした。人を神から引き離し、神のご計画を妨害する以外に自らの支配権を打ち立てるすべのないサタンは、次の策略に乗り出すこととなります。

エバに最初の子どもの生まれたとき、エバはこの子こそ神が与えると約束されたメシヤ（解放者）である、と思ったに違いありません。神からの分離を意味する「霊的な死」に引き続き、「ついに、あなたは土に帰る」と、遅かれ早かれ、肉体の死が訪れることを宣告されていたアダムとエバに、預言通り、子ども、すなわち、新たないのちが授けられたとき、エバは「主によってひとりの男子を得た」と、信仰表明したのでした。ところが二人目のアベルが生まれた後、この長子カインが約束の「メシヤ」ではなかったことが判明する大事件が持ち上がります。信仰の歩みを始めたばかりのアダムとエバ二世による人類初の殺人事件です。人から子、子孫へと普遍的に受け継がれることになった罪を贖うには動物犠牲の血による身代わり以外にないという教えは、神がアダムとエバに初めて「皮の衣」を与えてくださったときに教えられたことでしたが、神のみ旨を行っていたアベルに対してカインは、神の命じられたことよりも自分の価値観や考え、気持ちを優先し、自分が良いと思う地の産物からのささげ物をささげたのでした。神に目を留められた弟をうとましく思ったカインは、神に対しても憤り、顔を伏せます。紛れもない心の内にある罪の反応でした。そこで神は、「あなたの行いが間違っているならば悔い改めて神に立ち返りなさい。さもなければ、サタンがあなたを支配するようになり、あなたは罪から罪へと墮落の道を歩むことになる」と警告され、神との正しい関係に戻るチャンスを与えられたのでした。最初の人アダムが神に逆らい墮落して以降、生れてくる人はみな、このようにして神に立ち返ることにより、日々軌道修正を

し、人を滅びに招きいれようと大手を広げて待ち構えているサタンを克服していかなければならないのです。

しかし、カインは神に立ち返るところか、アベルを殺し、神が再度悔い改めのチャンスを与えられたときには、「**知りません。私は、自分の弟の番人（「アベル」の意味）なのではないでしょうか**」と、死人に口なしを幸いとはばかり、罪を犯したことを否定、アベルに聞けとうそぶいたのでした。しかしすべてをお見通しの神は、「**あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる**」と答えられ、農夫カインが土地からのろわれ、もはや労働に見合った産物を得ることはできず、地から地へとさすらい、罪の刈り取りの人生を歩まなくてはならないことを宣告されたのでした。罪のゆえに神の守りの覆いを取り除かれ、サタンの支配するこの世にすべてがさらけ出されることが何を意味するのか、事の重大さに恐怖を感じ、憐れみを請うたカインに、神は、だれもカインを殺すことはできないという守りのしるしをつけられました。罪の刈り取りの苦しみの人生を経て神に立ち返るチャンスをカインに与え、究極的には救われることを願われて、神は、カインにこの世のいのちの保証をされたのでした。

神の裁きを預言を通して宣告されたサタン自身、カインが生まれたとき、エバと同じようにカインこそ約束のメシヤであると思ったことでしょう。滅びがすぐにでも我が身に降りかかることを恐れたサタンが、カインがメシヤどころか、神のみ旨から大きくかけ離れた殺人者となるような陰謀を企てたことは十分考えられることです。実際、サタンの陰謀は成功して、カインは主の道を歩んでいたアベルを殺し、図らずも神のご計画を挫折させるかのようにみえたのでした。のろいの人生を歩まされたカインの血筋から生まれる子孫はすべて、サタンの王国に入れられると、サタンはほくそえんだことでしょう。実際、カインの子孫は、家畜を飼う者の先祖ヤバルはじめ、豎琴や笛を巧みに演奏する音楽家の先祖ユバルや、青銅、鉄を扱う鍛冶屋の先祖トバル・カイン等、この世の文明に貢献する多くの者を生み出し、他方で神の掟から逸脱し、神を恐れない者が増えていったのでした。カインから六代目のレメクなど、「**私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍**」と二人の妻たちに、殺人を犯した自分は正当防衛であったので、意図的な殺人を犯したカインが神によって赦されたのであれば、自分はその十一倍も赦され守られると、豪語するありさまでした。人々はサタンの意図する方向に歩いていくかのようでした。

しかし、神はアダムとエバにセツを授けられ、神のご計画はそのまま遂行されることとなります。サタンの策略はまたしてもくじかれたのです。詩篇の著者は「**天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざげられる**」と、悪者が神にとっては風が吹き飛ばすもみ殻のような存在でしかないことを語っていますが、まさに神は、サタンをあざ笑うかのように、アダム、セツの血筋からメシヤを誕生させることを、アダムから十世代にわたる者たちの各々にメシヤ預言のメッセージを託した名をつけさせることによって、明確にさせられたのでした。アダムには「人」、セツには「定められた」、エノシュには「死すべき、惨めな」、ケナンには「悲しみ」、マハラエルには「祝福の神」、エレデには「降りてくる」、エノクには「教える」、メトセラには「彼の死はもたらす」、レメクには「絶望的」、ノアには「休息、解放」という意味がありますが、これらの名をすべて連ねると、「人は定められた。死すべき、悲しい者として。しかし、祝福の神は降りてこられ、教えてくださる。（ご自身の）死がもたらす絶望的なことが休息であることを」という預言的メッセージが織り込まれていたのです。近未来的には、メトセラが死ぬとき全地を水没させる大洪水が起こり、ノアの家族だけが裁きを免れ、救出されることになるという預言であり、遠未来的には、メシヤが天から下ってこられることによって、罪のゆえに死が定められ滅びに至るしかなかった人間に、永遠のいのちが与えられ、神とともに休息に入ることになるという人類救済の預言でした。実際、アダムから七代目のエノクはその名前通り、人類の救いがキリストの再臨によってもたらされることを、「**見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいについて、彼らを罪に定めるためである**」（ユダの手紙 14-15 節）と、教えたのでした。

そこで、サタンが企てた次の陰謀は、人間の血筋を随天使との不自然な結婚によって汚し、破滅させることでした。「**全人類の血筋が神のご計画外の結婚、子孫誕生によって汚染されれば、もはやどの血筋からもメシヤを生み出すことはできないであろう**」というのがサタンの考えたことでした。サタンの策略通り、全地が人の諸悪一背信、暴虐、不道徳一で墮落し、汚染されたため、神は、サタンによって汚染された人類すべてを全地もろとも洪水によって滅ぼすという大変な荒療治を決行されたのです。すでに築き上げられていた高度な文明が全部水面下に消えてしまうという全世界的な大洪水は、神が引き起こされた裁きだったのです。このようにして神は、「**自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められ**」（ユダの手紙 6 節）、全地を刷新されましたが、当時唯一の「**全き人**」、すなわち、神とともに歩むことによって、サタンの誘惑を克服し、道徳的のみならず身体的に汚染されることのないノアの家族八人を残すことによって、メシヤ誕生の道は残されたのです。神はノアに箱舟造りを命じられたとき、滅びまでのときを百二十年と定められ、人々に悔い改めに必要な十分な期間を与えられたのですが、残念ながら罪を治めることのできなかつた人々は、神の憐れみにもかかわらず、滅びる以外なかつたのでした。